

フランス第三共和政の美術行政と芸術
—ジュール・ダルーによる《共和国の勝利》を例として—

安藤 智子 清泉女子大学

フランスの彫刻家ジュール・ダルー(1838-1902)は、ギュスターヴ・クールベとともにパリ・コミューンに参加した責務を問われ、1871年にはロンドンへ政治亡命する。その後ロンドンで制作を続けるが、1879年に恩赦を受けて帰国する時期に、レピュブリック広場(旧シャトー・ドー広場)に建立するための共和国の記念碑のコンクールに応募する。

本発表では、このコンクールにダルーが提出した《共和国の勝利》を取り上げる。このダルーの案は審査では落選したにもかかわらず、ナシオン広場(旧トロヌ広場、1880年改名)に建造されるに至った事実に着目し、当時の公文書を手かがりとして、ダルーへ記念碑が発注された過程を検証することによって、美術行政と芸術作品の関係性を考察する。

このコンクールは、フランスでは1878年に共和主義者が国民議会の大半を占め、初めて共和主義者主導の政体となり、同年開催のパリの万国博覧会に続き、ナショナリズムの気運が高まっていた社会状況を背景としている。同時期に記念碑や胸像、メダルという形で共和国のシンボルが公募され、ダルーは歴史的にも重要な場所に、共和国を表す女性を中心とした群像による記念碑を構想した。

ダルーによる《共和国の勝利》では、二頭のライオンに跨り松明を持つ男によって先導された台車が据えられ、その中央に共和国である女性が立ち、台車の周りには女性、子供、労働者の彫像が配されている。とくに民衆による共和主義を具現化した労働者像が特徴的であり、これはイギリス滞在時代にダルーが親しく接した画家アルフォンス・ルグロをはじめとするオラス・ルコック・ド・ボワボードランのアトリエ出身の芸術家たちが1870年代前半において共通に扱ったテーマである。

1879年の同コンクールの審査会議記録(パリ市古文書館所蔵)には、セーヌ県知事を長として審査委員会が組織され、そこで厳正な審査が進められた結果、モーリス兄弟による《共和国の記念碑》が選ばれることになった経過が詳細に記されている。パリ・コミューンに参加していた仲間として、共和主義左派の芸術家たちはダルーの案を強く支持し、一方で他の審査委員は、ダルーの案が共和国の記念碑の公募条件を満たしていないと慎重に退ける態度をとっている。つまり保守的な芸術志向に対して、政治的左派の立場をとる政治家や芸術家たちがダルーの《共和国の勝利》の発注を強力に推し進めるといふ図式が浮かび上がり、政治的な力学においてダルーの記念碑がパリ市によって建造されたことを明らかにする。

(あんどう・ともこ)